The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	2回の自然観察会をふり返って
Author(s)	樫本, 直樹
Citation	臨床哲学のメチエ. 2007, 16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12452
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

２回の自然観察会をふり返って

樫本　直樹

「意外といけるんじゃないの」、２回目の自然観察会をおわって率直にそう感じた。自然観察会の中で哲学カフェを行うということについてである。巷で行われているいわゆるふつうの自然観察会では、自分が何を感じ、何を考えたのかをあえて口にすることは少ない。もちろん参加者同士や主催者（引率者）と会話はするし、感想を述べあうことはある。でもそこで行われているのは、自然について知っている（詳しい）人が知らない（詳しくない）人に教えるという、一方向の情報伝達である。それに対し、環境班の考えている自然観察会では何かを教えるという気はさらさらない。環境班が重視するのは、参加者がまさに今見てきたものから感じたこと、考えたことを実際言葉にし、他人に伝えること、そしてその言葉をきっかけとして、そこから考えられることを参加者全員で考えるというプロセスであるといっていいように思う。

一回目の哲学カフェでは、〈本当の自然〉ということに、二回目のそれでは〈自然との一体化〉ということに参加者は引っかかりを感じ話しが展開した。もちろんその話し合いによってその

引っかかりに対して何か納得した答えが得られたとか、それによってその後の行為に変化が生じたとか、そういうことはなかったかもしれない。でも、〈本当の〉〈自然〉〈一体化〉というふだん何気なく使っている言葉でイメージしているものが他人と食い違い、自分がそれらの言葉で何を言おうとし、また何を前提にしているのかを考える／考えさせられるという場があるということがとても重要だと思った。

また、この哲学カフェは自然観察会の中に位置しているけれども、必ずしも自然について話さなければならないというものではないということも重要であるように思った。確かに、出発点は感想や感覚の表明であったとしても、他人との意見の食い違いや問いかけをきっかけとして、例えば〈人を理解するとはどういうことか〉が問題になってもいいし、〈環境保護〉そのものが問い直されてもいい。つまり、哲学カフェが自然観察会に中にあることによって、それは自然について考えるために一旦立ち止まる場として、そして自然を通して考えたことを日常生活に接続する場として機能するというひろがりをもつ。またそうした場があることで、それまで自然観察会に参加したことがない（興味を示さなかった）人を取りこむということになるかもしれず、そういう意味でも従来の自然観察会という活動の幅をひろげる可能性があるように思う。

実を言うと（すでにばれているだろうが）、この自然観察会はまだまだ試行段階であり、一回目は環境班のメンバーで行い、二回目はほぼ臨床哲学関係者で行った。比較的議論に慣れた人が多く、よいところだけを見て私がいけると早合点しているだけかもしれない。今後はより一般の人びとの割合をふやして開催していくことになると思うので、私がこの自然観察会に寄せている期待のようなものは、ガラガラと崩れる可能性はある。でも〈ほぼ関係者でやったから〉ということを差し引いても、まだなんとなくいけるような気がしている。

最後に臨床哲学として（ちょっと気が引けるので臨床哲学のゼミの中で）〈環境〉にかかわることについて少し。確かに〈環境〉というと漠然としていて、〈自然観察〉というと遊びの延長のように聞こえるかもしれない。しかし、環境を通して問題となることは、問題に対するアプローチの違いはあるが、医療や教育などを通して考えようとしている問題と何かが異なるということはないように思う。環境班の自然観察会に参加する人が増えたらいいな、と思っている。